

ロルフ・クニューテル先生を偲んで

五十君麻里子

2019年9月25日 Rolf Knütel 先生が、白血病により、79歳9ヶ月でお亡くなりになった。

先生は、ナチスドイツによるポーランド侵攻の年1939年12月23日にハンブルクにお生まれになり、戦後ハンブルクとフライブルクで法学をお修めになった後、Max Kaser 先生の下で博士論文と教授資格請求論文を著された。その後1977年に、Werner Flume 先生の後任として Rheinische Friedrich - Wilhelms - Universität Bonn に正教授として迎えられてから、2006年のご定年まで、主にローマ法・民法の教育研究に尽力され、その後も名誉教授として精力的に研究活動を継続されたことは、周知のとおりである。特に Corpus Iuris Civilis のドイツ語翻訳には、お亡くなりになる直前まで、文字通り心血を注がれていたと仄聞している。

詳しいご経歴はこちら：<https://www.jura.uni-bonn.de/institut-fuer-roemisches-recht-und-vergleichende-rechtsgeschichte/em-prof-dr-rolf-knuetel/>

初めてのご著書 *Contrarius Consensus*. (Köln/Graz) は、1968年の出版であり、当時まだローマ法学界には *interpolatio* 研究の名残があったため、Knütel 先生ご自身も1990年代には「今なら違った書き方をした」と述懐しておられた。最晩年のご論文の一つである "Papinian D. 46,3,95 pr.-1 (28 quaest.)", in: Finkenauer / Sirks (Hrsg.), *Interpretationes iuris antiqui. Dankesgabe für Shigeo Nishimura*, (Wiesbaden 2018)で、記念論文集という趣旨に一見そぐわぬ峻烈な批判を繰り広げられておられるのは、*Zeitgeist* から自由であることの困難を、よくご存知だったからなのかもしれない。先生のご

業績は、美文ゆえの難解さを伴いつつも議論は明晰、Dogmatik に強く、今後も長く現在と将来のローマ法研究者に示唆を与えていくことと思われる。

ご業績のリストはこちら：

[https://www.jura.uni-bonn.de/fileadmin/Fachbereich\\_Rechtswissenschaft/Einrichtungen/Institute/Roemisches\\_Recht/Schriftenverzeichnis\\_Knuetel\\_05\\_2019.pdf](https://www.jura.uni-bonn.de/fileadmin/Fachbereich_Rechtswissenschaft/Einrichtungen/Institute/Roemisches_Recht/Schriftenverzeichnis_Knuetel_05_2019.pdf)

東アジアとのご関係は深く、中国におけるドイツ法主要文献翻訳プロジェクトや、忠南大学校（韓国）申有哲先生と Reinhard Zimmermann 先生の企画による独韓シンポジウムに参加され、Konferenz der Deutsch sprachigen Juristen in Ostasien の立ち上げにも惜しまず協力された。しかしなかでも、日本との関わりは格別で、福岡における 1991 年の mandatum に関する国際シンポジウムの初来日以来、たびたび来日され、1998 年の国際シンポジウム『日本民法百年～比較私法史的検討』には中心メンバーとして深く関わられた。とりわけ西村重雄先生との友情は深く、上記 "Papinian D. 46,3,95 pr.-1 (28 quaest.)" の冒頭の注にも、そのことが現れている。また、多くの日本のローマ法・民法研究者が、在外研究等で温かく受け入れていただき、先生の薫陶を受けた。

Knütel 先生はスピーチの名手で、日頃読解に悪戦苦闘しているローマ法文さえ、その心地よい少し高めの声と美しい Hochdeutsch の独訳で語られると、詩の一節のように聞こえ、ケケロやカエサルの演説もかくありなん、と思われたものである。また、愛妻家としても有名で、何度目かの福岡ご滞在の折、ホテルへの徒歩での帰路、ひとり皆から遅れられた先生に「どうされましたか」と

尋ねたところ、店のウィンドーに飾られたモノトーンチェックのコートを指して「これ、バルバラに似合いそうだな、と思って」とはにかんでおられた姿が追想される。

先生にいただいた学恩に深く感謝し、心からご冥福をお祈りする。